

令和4年1月28日

報道機関各位

シンポジウム「野生の営みのダイナミクスに迫る ～世界遺産シリエトクの高マとエゾシカ」を開催します

野生動物と人間との共存を図り、知床の素晴らしい自然を次世代に引き継いでいくために、当研究所ほか関係機関で取り組んでいる最新の研究結果をご紹介します。

- 知床における高マの生息数や食物事情、エゾシカの生存戦略など、全5件の講演を予定しています。（詳しくは添付のチラシをご参照ください。）

なお、本シンポジウムは、（独）環境再生保全機構 環境研究総合推進費「遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発」【4-1905】の一環として開催されます。

◎ 日 時

令和4年2月12日（土） 13:30～16:30

◎ 開催形式

オンライン開催（Zoom Webinar）（※新型コロナウイルス感染症拡大状況を踏まえて、会場開催を中止しました。）

◎ 参加費

無料

◎ 定 員

400名

◎ 主 催

東京農工大学、（地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所、
北海道大学大学院獣医学研究院、（公財）知床財団

◎ 申込方法

次のホームページからお申し込みください。

<https://cloud.conference-er.com/event/c0601343074>

◎ 報道（取材）に当たってのお願い

- ・新型コロナウイルス感染症対策のため、事前に下記の担当者までご連絡ください。

詳しくはこちらへお問い合わせください。

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構（道総研）

産業技術環境研究本部 エネルギー・環境・地質研究所 研究推進室 研究情報グループ
（担当者：主査（広報） 羽二生 浩孝）

電話 011-747-2427 ※平日8:45～17:30 土・日・祝日・年末年始はお休みです。

Eメール eeg-koho@ml.hro.or.jp

一般公開シンポジウム

野生の営みのダイナミクスに迫る 世界遺産シリエトクのヒグマとエゾシカ

2022年2月12日(土) ZOOM Webinar



川をのぼるサケ、それを捕らえる大きなヒグマ、ヒグマの糞によって育まれる豊かな土壌と動植物 …

このような海-川-陸にわたるダイナミックな生態系のつながり、生物多様性の高さ、そしてその管理体制が評価され、知床は平成17（2005）年に世界自然遺産に登録されました。一方で、ヒグマの市街地への出没など、人とヒグマのあつれきが後を絶たず、生息数を増加させたエゾシカが、貴重な植物群落に大きな影響を及ぼしています。私たちは、野生動物と人間との共存を図り、世界自然遺産の価値を向上させるために、様々な調査研究に取り組んできました。

いま、知床でなにが起きているのか。

知床の素晴らしい自然を次世代に引き継いでいくために、何ができるのか。

最新の研究結果をもとに考えたいと思います。

— プログラム —

13:30～13:35 開会あいさつ

及川 雅稔 （地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

13:35～13:45 趣旨説明

宇野 裕之 東京農工大学

13:45～14:05 **知床の野生をめぐる歩み**

山中 正実 （公財）知床財団

14:05～14:25 **はたしてヒグマは何頭いるのか？ — 数から読み解くヒグマの生態**

下鶴 倫人 北海道大学

（休憩）

14:40～15:00 **海へ山へと大忙し！ — 知床のヒグマの食物事情**

白根 ゆり （地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

15:00～15:20 **ヒグマとの攻防戦？ — 知床のエゾシカの過去と現在**

石名坂 豪 （公財）知床財団

15:20～15:40 **エゾシカの生存戦略 — なぜ高密度が維持される？**

宇野 裕之 東京農工大学

（休憩）

15:55～16:25 質疑応答

16:25～16:30 閉会あいさつ

村田良介 （公財）知床財団

主催 東京農工大学，（地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所，北海道大学大学院獣医学研究院，（公財）知床財団
後援 環境省釧路自然環境事務所，北海道，（一社）日本哺乳類学会
本シンポジウムは（独）環境再生保全機構 環境研究総合推進費【4-1905】「遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発」の一環として開催されます。



知床の野生をめぐる歩み

知床の自然が学術的に報告されたのは、1954年と1965年の総合調査が最も初期のものと言えます。その後、1979～1980年の自然生態系総合調査は、この地が豊かな大型野生動物群集によって特徴付けられることを具体的に明らかにし、今に続く当地の活発な野生動物研究と保護管理活動の契機となりました。これらの知床の「野生を知る」取り組みとともに、1964年の国立公園化、2005年の世界自然遺産登録など「野生を守る」仕組み作りも進んできました。今日に至る知床の野生をめぐる歴史について概観します。



山中 正実（やまなか まさみ）

（公財）知床財団／特別研究員

同財団の創設に関わり、その後、財団を我が国の国立公園に欠落していた調査研究・保護管理から普及活動まで総合的に担う実働組織として機能させる仕組み作りに奔走してきた。知床世界自然遺産地域科学委員会特別委員、日本哺乳類学会保護管理専門委員会委員。

はたしてヒグマは何頭いるのか？

— 数から読み解くヒグマの生態

ヒグマは北海道の豊かな自然を象徴する日本最大の陸生哺乳類であり、一方で農作物被害や人身被害を引き起こす可能性のある動物です。知床半島は世界でも有数のヒグマの高密度生息地と言われてきましたが、その数については謎に包まれていました。このたび我々は入念な野外調査とDNA解析技術を用いて、知床半島に生息するヒグマの数や、産子数・生存率といった繁殖状況を明らかにすることを試みました。

「はたして知床にヒグマは何頭いるのか？」 最新の研究成果をご紹介します。



下鶴 倫人（しもづる みちと）

北海道大学大学院獣医学研究院／准教授

1979年生まれ、神奈川県出身。知床半島を主なフィールドとして、ヒグマの繁殖や行動様式に関する生態学的研究に取り組んでいる。日本クマネットワーク事務局長を務める。獣医師、博士（獣医学）。

海へ山へと大忙し！

— 知床のヒグマの食物事情

海岸から高山帯に至る多様な食物資源を擁している、知床半島。ここでは、ヒグマは木の実やサケなど、様々なものを食べています。しかし、夏の知床では、ガリガリに痩せたヒグマや餓死した子グマが目撃されることがあります。たくさん食物があるはずなのに、どうしてでしょう。本講演では、ヒグマが利用する食物の季節変化と年次変動について、そしてそれに伴う栄養状態や行動の変化について、9年間の調査結果を報告します。さらに、食物不足と人里への大量出沒との関係についても考えます。



白根 ゆり（しらね ゆり）

（地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所／研究職員
北海道大学大学院獣医学院博士課程を修了し、2021年より現職。大学在籍中、知床で約1,500個のヒグマ糞を集めて分析した。現在は、遺伝子分析や画像解析を用いて農作物に被害を与えるヒグマの研究に取り組んでいる。

ヒグマとの攻防戦？

— 知床のエゾシカの過去と現在

知床半島のエゾシカは、明治初期の豪雪年におそらく一旦地域絶滅し、1970年代以降に本格的に再分布しました。その後爆発的に増加した知床のエゾシカは、海岸草原や森林の植物・動物に大きな影響を与えています。ヒグマも例外ではなく、衰弱・負傷したエゾシカの捕食、出産直後の子ジカの捕食、双方にとって餌となる草本やドングリの奪い合い等を通じて、正と負両方の影響をエゾシカから受けています。

今回は知床のエゾシカの過去と現在について、ヒグマとの関係性に注目しながら紹介します。



石名坂 豪（いしなざか つよし）

（公財）知床財団／主任研究員・保護管理部長
知床半島でエゾシカ、ヒグマ、トドなどの調査や被害対策に従事。エゾシカ対策有識者会議委員（北海道）、北里大学非常勤講師などを務めている。共著書に「日本のシカ」、「となりの野生ヒグマ」など。獣医師、博士（獣医学）。

エゾシカの生存戦略

— なぜ高密度が維持される？

知床では1980年代からエゾシカの数が爆発的に増加し、地域の植生や動物相に大きな影響を及ぼしています。自然遺産地域の生物多様性を保全していくために、エゾシカの個体数調整が行われてきましたが、彼らの詳しい生存率や繁殖率は判っていません。捕獲を実施している幌別・岩尾別地域と自然の推移に任せているルシャ地域のエゾシカに首輪型発信器を装着して追跡調査を行ってきました。

彼らの「生き残り戦略」に焦点を当てて、これまでの研究成果をご紹介します。



宇野 裕之（うの ひろゆき）

東京農工大学大学院農学研究院／特任教授
前職は（地独）北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所自然環境部長。主に道東地域をフィールドに、エゾシカの季節移動や個体群生態学的研究を行っている。知床世界自然遺産地域科学委員会委員、エゾシカ対策有識者会議委員などを務めている。